Fate/stay night 〜 その時聖杯に願うこと

石・丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　～　その時聖杯に願うこと

【Ｎコード】
Ｎ３４９２ＢＡ

【作者名】
石・丸

【あらすじ】
全てを終え眠りについたセイバー。しかし運命の悪戯か、目覚めた彼女の前に衛宮士郎の姿が。
いつか見た光景に戸惑いながらも、彼女は彼に問いかける。
『――――問おう。貴方が、私のマスターか』
聖杯戦争再構成。セイバー逆行もの。
（ａｒｃａｄｉａ様に投稿した作品の加筆、修正ｖｅｒになります）

第一話

「ちょいとばかり驚かされもしたが――もしかしたら、お前が最後のマスターだったのかもな？」

「……マスター？」

薄く靄がかかったような思考の中に声が響く。しかし、そんなものに頓着している暇など私にはない。

何故なら、今まさに彼は“敵”に命を奪われようとしているからだ。

翻る真紅の槍。その切っ先は、真っ直ぐに彼の心臓へと向いている。

逡巡する間などありはしない。私は魔法陣から出るや、彼へと迫る閃光のような一撃を力の限り打ち弾いた。

瞬間、腕に伝わる激しい衝撃。

宝具通しのぶつかり合いは、目も眩むばかりの魔力の発光を促し、その光で薄暗い土蔵が明るくなった。

「――――本気か、七人目のサーヴァントだと……！？」

態勢を整えている暇はない。私はそのまま流れるように踏み込むと、槍を構えた男へ叩き付けるような一撃を放った。

槍を携えた男――ランサーは、手にした槍の腹で一撃を捌くも、衝撃に押され僅かに態勢を崩す。

「チッ――！」

軽く舌打ちをしながら、ランサーが後退する。

それは神速の如き素早さで、ランサーは私が一息も吐かないうちに土蔵の外へと身を躍らせていた。
しかし、これで彼の命を救うという当初の目的は達せられた。
私は油断なく外のランサーを牽制しながら、ゆっくりと背後にいるだろう人物を振り返った。

――覚えている。

とても風の強い日だった。
あの日と同じ月明かりが、まるで銀光のように土蔵へと射し込み、私と目の前で尻餅を付いている少年を照らしている。

「――――――」

彼は驚いたように呆けながら、声も無く私を見上げていた。
赤茶けた短髪。男性としては低い身の丈。だけど決して華奢ではない。日々の鍛錬の賜物なのだろう。全身あますとこなく鍛えられていて逞しい。
私はその力強さを知っている。
彼のやさしさ、暖かい温もりも知っている。そして、余人では背負いきれないだろう彼の理想も。

思えば無茶ばかりしていた。いつも傷ついて、それでも決して倒れなかった。理想の重さに潰されそうになりながらも、走りつづけた。
そんな彼を、いつしか愛おしいと思うようになって――
声を荒げて喧嘩をしたこともある。
互い互いを想い、それでも曲げることの出来ない思いからぶつかったのだ。あの夕焼けた世界の中で彼の在り方を罵倒し、そんな私に対して彼はもう知らないとばかりに走り去って行く。

薄く滲んだ視界の中で、だんだんと小さくなっていく彼の背中。遠くにいくにつれて心に広がった小さな波紋。

辛かった。心が痛かった。

けれど、彼も辛かったに違いない。心が痛かったに違いない。それでも彼は私を迎えに来てくれたのだ。

あの時の手の温もりを、私は忘れることはないだろう。

「――――――」

シロウと、そう呼んだら彼はどんな顔をするのだろう？

言葉もなく、ただ私を見上げている彼。

やはり驚くだろうか。

けれど、今、私が言うべき言葉は決まっていた。私は、言葉に万感の想いを乗せて――

『――――問おう。貴方が、私のマスターか』

そっと、それだけを口にした。

「え……マス……ター……？」

彼はオウム返しに問われた言葉を口にする。

私が何者なのか、今現在何が起こっているのかが判らずに、混乱をきたしているのだろう。

でも私は知っている。貴方が何者なのかを。

「サーヴァント・セイバー。召喚に従い参上した。マスター、指示

を」

私の声を耳にした瞬間、彼が左手の甲を押さえながら苦痛に顔を歪める。

そう“令呪”が現れたのだ。

サーヴァントとマスター。

令呪が異なった存在である私達を繋ぐ。私にとって唯一のマスターである貴方と。

「これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある――――ここに、契約は完了した」

「け、契約って、なんのっ！？」

今は説明している時間はない。外にはランサーが控えているのだ。

私は彼に背を向けるや魔力を脚に乗せ、土蔵の外へと身を躍らせた。

「やめっ――――！」

やめろ。そう言おうとしたのだろう。その彼の声を背中に受けながら、出会いがしらにランサーへ聖剣を叩き付ける。

土蔵から飛び出た瞬間、待ち構えていたランサーとぶつかったのだ。

互いの宝具が相手を仕留めるべく翻る。私は振るう一撃に魔力を込め、爆発させた。

ランサーと私にはかなりの体格差があるが、そんなものは溢れる魔力で埋めてみせる。

「はぁっッ！！」

上段から袈裟斬りに振り下ろす。その一撃を槍の腹で受け止めたものの、魔力爆散の影響でランサーが後退した。

間合いが開く――だが、攻撃の手を緩めるわけにはいかない。

私は彼の後を追撃するや、縦横無尽、連撃を火のように加えていく。それらの一撃をランサーが受ける度に、激しい剣戟の音と併せて火花のような閃光が散った。

「ぐっ……卑怯者め。自らの武器を隠すとは何事か――――！」

苦虫を噛潰したような表情でランサーが悪態を吐く。

さしものランサーも、この武器相手ではやりにくいとみえる。

何せ私の持つ剣は相手の視界に映らない。文字通り見えないのだから。

――ならば、押し込む。

聖剣を下段に構えたまま肩から突進し、迫る紅撃を打ち上げた。

そして、返す刃で空いた空間に一撃を放つ。

「てめぇ……！」

ランサーが更に後退するのに合わせ更に押し込んでいく。

激しく散る魔力の飛沫に合わせて剣舞のように続く連撃。それでもランサーは私の全ての攻撃を防ぎきっていた。

初見で、しかも見えない武器相手だというのによくやるものだと感心する。

だが防御に徹して防ぎきれるほど私の攻撃は甘くない。

彼が守るなら、その守りごと撃ち砕く。

私は渾身の力を両腕に込めて、相手のガードごと打ち砕くべく聖剣を振り上げた。
だが……
「調子に乗るな、たわけッッ――――――！」
聖剣を振り下ろすのと同時に、視界からランサーが消え失せる。
「ち……！」
見失った敵の気配を直感を頼りに探り当てる。
彼は一旦後方へと飛び退り、着地と同時に弾けるようにして舞い戻って来ていた。
しかし、相手の行動が読めても私の体勢は崩れたままだ。振り下ろした聖剣は未だ地面を撃ち据えたままであり、敵であるランサーが眼前に迫っている。
ここが勝機とばかりに、必殺の一撃を繰り出すランサー。
しかし、私とてセイバーの名を冠するサーヴァントだ。
迫る一撃を円を描くようにして避けると、そのまま相手の脇腹に向かって聖剣を走らせて――
「ぐぅ――――ッ！！」
「ぬぅ――――っ！！」
激しい衝撃が両腕から全身へと伝わっていく。
渾身の一撃は互いの武器を打つに留まったようだ。そして、その勢いで私とランサーの間合いが大きく開く。
一瞬の静寂。
離れた間合いの中でランサーは槍を構え、じっと私を睨み据えていた。

「どうした、ランサー？　止まっていては槍兵の名が泣こう。それとも私から行った方がいいかな」
「ハッ！　わざわざ死にに来るか。それは構わんが、その前に一つだけ訊かせろ。貴様の宝具――それは剣か？」

ランサーを射抜くように見つめる。
あの時と“同じ”問い。ならば此度の私の答えも決まっている。
「さあ、どうかな。戦斧かも知れぬし槍剣かも知れぬ。いや、もしかしたら弓かも知れんぞ、ランサー？」

私の答えを受けて、ランサーは面白そうに口端を歪め
「――はっ。ぬかせ、剣使い」

と言い放った。
次いでランサーは、僅かに槍の穂先を下げ、もう一度だけ口を開く。
「……ついでにもう一つ訊くが、お互い初見だしよ、ここらで分けって気はないか？」

私を視界に納めたまま、ランサーが私の後方へと気配を向ける。
そこには、いつの間に土蔵から出てきたのか、私のマスターたる彼が呆然と佇んでいた。
「悪い話しじゃないだろ？　ほら、あそこで惚けているお前のマスターは使い物にならんし、俺のマスターとて臆病者でね。イレギュラーな事態が起きたなら帰って来いとぬかしやがる。ここはお互い

万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいんだが……」

月明かりを全身に浴びながら、ランサーが私の答えを待っている。その間に私は、視線だけを動かして自身のマスターを捉えた。

彼は心配そうに私のことを見つめている。

先程まで自身が殺されかけていたにもかかわらず、私のことを案じているのだ。

本当に彼らしい。

私はほうっと小さく息を吐いてから、改めてランサーに視線を戻した。

「良いだろう、ランサー。その提案を受けることにする。今宵は――ここまでとしよう」

「ほう、以外に融通が利くじゃねえか。セイバーなんてどいつも堅物だと思っていたが。いや、助かったぜ」

先に私が剣を下げたのを見届けてからランサーも槍を下げた。

と思ったのも束の間、僅か一足で広い衛宮の庭の隅まで移動する。

「じゃあな。次に会う時を楽しみにしてるぜ、セイバー」

それが最後の言葉。

青き槍兵は、身軽に塀を乗り越えて夜の闇に消えて行った。

ランサーを見送ってから聖剣の存在を掌から消す。それを待っていたかのようなタイミングで、背後から駆け寄ってくる乱雑な足音が耳に届いた。

「――――なんで」

足音は私の側で止まる。

それを確認してから、私はゆっくりと己がマスターを視界に納める為に振り返った。

――シロウ。

彼は私に声をかけようとして口を開こうとするが、まだ混乱しているのか、言葉を出さずに閉じる。そんな行為を繰り返していた。

……ああ。これは奇跡なのだろうか。

私の目の前に彼が、シロウがいる。

あの激闘の後、確かに別れた私の半身。もう会えないと、せめて夢の中でならと眠りについたはずなのに……彼が、今まさに私の目の前にいるのだ。

思わず彼に手を伸ばしてしまう。それにあわせて身に纏った鎧が軽い金属音を奏でた。

その音に驚いたのだろうか、彼が半歩だけ後ろに下がる。

――いけない。

私は何をしているんだ？　こんなことをしてもただ単に彼を驚かせるだけなのに……。

そう思ったものの、一度動き出した想いは止まらなかった。

駄目だ、やめろ――！

心の声に反して身体が動く。

半歩下がった彼に離されないように、一歩だけ近づいた。今度は

彼も動かない。
そして、視線が逢った。
掌が彼の頬を抱くように伸びて――気がついてみれば、私は彼をきつく抱き締めていた。ゆっくりと伸ばされた腕が彼の背中へと廻っている。

ああ、シロウが私の腕の中にいる。
シロウが、シロウが、シロウが――私の腕の中にいるのだ。

それは永遠とも思える時間。私は月光をその身に浴びながら、彼の胸に顔を埋めその温もりを感じていた。
音の無い静寂の中。密着した身体から彼の動きが伝わってくる。
もしかしたら、私は震えていたののかもしれない。彼はそっと私の肩に手を置いてから、落ち着いた声で

「――なんで、泣いてる？」

はっと、彼を見上げた。間近で視線が絡み合う。
そして気付く。頬を伝う熱さに。

私は……泣いているのか？

これじゃいけないと、私は慌てて彼から腕を離し背中を向けた。
それから右腕で目元を覆ってから、改めて彼に向き直る。
今度は強く自分を律しながら。

その行為で場に緊張感が戻ってきた。彼は私の変化に戸惑いながらも疑問を口にする。

「――――おまえ……何者だ？」

「何者もなにも、セイバーのサーヴァントです。シ……貴方が私を呼び出したのですから、確認するまでもないでしょう」
「セイバーの……サーヴァント……？」
何を考えているのだろう。彼の目が驚きに見開かれている。
「はい。ですから、私の事はセイバーと」
――そう、呼んでください。
「そ、そうか。セイバーだなんてヘンな名前だな……」
彼はそわそわと地面に視線を落としたり、私を横目で盗み見たりしながら、最後にぶっきらぼうにこう付け加える。
「お、俺は士郎。衛宮士郎っていってこの家の人間だ」
シロウ。そう、貴方の名前はエミヤシロウ。魂にまで刻まれている、永遠に忘れ得ぬ愛する人の名前。
だが、じっと見つめる私の視線を勘違いしたのか、彼が慌てたように両手を振った。
「いや、違う。今のはナシだ。訊きたいことはそういう事でなくてだな、つまり……」
「知っています。貴方は正規のマスターではないのでしょう？」
「え……？」
「しかし、それでも貴方は私のマスターです。契約を交わした以上貴方を裏切りはしない。そのように警戒する必要はありません」
「い、今……なん……て？　マスター？」

話にまったく付いていけてないのだろう。シロウが口篭もっているのが分かる。
けれど無理もない。命を狙われて、死にそうになって、窮地を助けてくれたとはいえ私は見も知らない不審者なのだ。すんなりと事態を受け入れる方がおかしい。

「ち、違うぞ。俺マスターなんて名前じゃない」
「それでは、シロウと。ええ、私としてはこの発音の方が好ましい」
「なっ……っ！！」

彼の顔が赤くなったのが分かった。
名前を呼ばれたのが恥ずかしかったのだろうか。何だか、そういう仕草は見ていて微笑ましく思える。

「ちょっと待てって！　何だってそっちの方を……て、痛っ――なんだ、これ。あ、熱くなってっ……！」

信じられない物を見つけたとばかりに、シロウが左手の甲を凝視している。
確認しなくても分かる。そこには刺青のような紋様が刻まれているはずだ。

「それは令呪と呼ばれるものです。私達サーヴァントを律する三つの命令権でありマスターとしての命でもある。無闇な使用は避けてください、シロウ」
「セ、セイバー？」
「シロウ。外に……」

一瞬、口篭もる。
敵――そう、今は“まだ敵”のはずだ。

「外に敵が二人います。この程度の重圧ならば問題ない相手ですが、放っておく訳にはいかないでしょう」
「……外に敵だって？　ちょっと待て。おまえまだ戦うっていうのか！？」
「向かってくるのなら応戦はします。とりあえず外に出ませんか、シロウ」

こうして私は、想像すらしていなかった、自身三度目となる聖杯戦争に身を投じることになったのだ。

第二話

屋敷から出た私達を待ち受けていたのか、十メートル程の距離を挟んで二人の人物と対面することになった。

青年と少女のペア。

勿論、今の私は彼等が何者であるかを知っている。

真紅の外套を纏った青年は、私と同じくサーヴァント。クラスはアーチャーだ。前回の聖杯戦争の折り、彼は“この場”で負傷し、以降は傷の回復を優先した為あまり私との接触は無かった。

故に彼に関しての情報はあまり持ち得ていない。

短く刈り込まれた白髪。ランサーにも負けない長身。無駄な鍛えられ方は一切していないのだろう。褐色の肌と相まって彼を見る者に精悍な印象を抱かせる。

何処か懐かしい雰囲気を漂わせる武人。私はそう感じていた。

もしかしたら、生前は私と縁のあった騎士だったのかもしれない。敵だったのか味方だったのか定かではないけれど、彼とてサーヴァント。英霊であり英雄なのだ。

だからなのだろうか。アーチャーは私のことを驚いたような視線で見つめている。

そして、彼の側にいる少女が、アーチャーのマスターである遠坂凛。

五大元素使いと呼ばれる卓越した魔術師であり、聖杯戦争のマスターとしての資質を高いレベルで兼ね備えている。明朗快活な性格で、とても気持ちの良い少女だ。

私は彼女のことをとても気に入っている。

しかし現状を鑑みて“敵対”する可能性がない訳ではない。いや、以前は私がアーチャーを切り伏せた為に共闘したが、今回は彼が健在なのだ。基本的に聖杯戦争は七組のマスターとサーヴァントによ

るサバイバルゲーム。
今すぐにでも戦いに発展することだってあり得る。
私はアーチャーを牽制する為に一歩だけ前に出た。手には再び現した聖剣を握り込んでいる。
「――――マスター、指示を」
アーチャーは帯剣こそしていないものの、マスターを守るような位置に身を置き私を見据えていた。彼の後ろにいる凛は、静かに事態の推移を見守っている様子だが、正直に言えば戦いたくない相手ではある。
「……止めてくれ、セイバー。正直に言って俺はまったく事態に付いていけてない。それに、おまえが敵って呼んだあいつ――俺の知ってる奴なんだ。そいつを襲わせるなんて出来ない」
やはり、彼ならそう言うと思った。
だが……。
「シロウ。彼女はアーチャーのマスターだ。今はまだ私達の敵なのです」
「そんな事は知らない。だいたいマスターだサーヴァントだって、俺には全然解らないんだ。理解して欲しいなら説明するのが筋じゃないのか？」
「それは……そうですが」
そのやり取りを聞いていたのだろう。
アーチャーを押し退けるようにして彼女が前に出てきた。
「ふうん。つまりそういうコトなんだ。へえ……素人のマスターね」

鈴を転がすような響きの良い声音。
シロウは、前に出てきた彼女を驚愕の表情で見つめながら、その名前を呟いた。

「遠坂――凛」
「あら？　私のこと知ってるんだ。なぁんだ。なら話しは早いわよね、衛宮くん？」
「な……」

場にそぐわない明るい口調に、一触即発の雰囲気が一気に軟化する。
私ですら拍子抜けしてしまう程なのだ。シロウなんて金魚みたいに口をパクパクさせて目を丸くしている。
そんな彼の様子は、少し、可笑しかった。

「知ってるって……そりゃおまえ学園の有名人だし……じゃなくてっ！　遠坂、おまえは……！」
「そう。貴方と“同じ”マスターよ。つまりは魔術師ってことになるわね。あなたも魔術師なんだし隠す必要もないでしょう？」
「ま、魔術師だってっ？　遠坂、おまえ、魔術師なのか……！？」

シロウの言葉を受けて、彼女の柳眉が不機嫌そうに寄った。
それに危機感を感じたのか、シロウが慌てて弁解を始める。

「あ、いや、違うんだ。俺の言いたいことはそういうことじゃなくてだな……つまり……」
「……そう。色々と納得いったわ」

彼女は思い切り嘆息してから、背後に控えるアーチャーを振り仰

いだ。

「アーチャー。悪いけどしばらく消えててくれるかしら。私、ちょっと頭にきたから」

「……解らないな、凛。頭にきたとはどういうことだ？」

「言葉通りの意味よ。アイツに現状を、自分の立場を思い知らせてやらないと気がすまなくなったの。貴方がいたらセイバーだって剣を収められないでしょ？」

「確かに。敵であるサーヴァントを前にしていては、悠長に話し込んでもいられないだろう」

「でしょ？」

「ふう。君にも困ったものだ。言い出したら聞かないのは分かってはいたが……命令とあれば従うしかあるまい。だが、一つ忠告すれば、それは余分な事だと私は思うがね」

やれやれと苦笑しながらも、アーチャーは彼女の言う通りにその存在を消していく。霊体であるサーヴァントは、姿を消しマスターの傍に控えることができるのだ。

その光景――アーチャーが消える様子を間近で垣間見たシロウは、驚愕のあまりか身体が硬直している。そんなシロウの様子など気にならないとばかりに、凛はシロウの真横を通り過ぎつつ衛宮の家に向かって歩み始めた。

「話しは中でしましょ。どうせ何も解ってないんでしょ、衛宮くんは。安心してね。嫌だって言っても全部教えてあげるから」

「待て遠坂っ！　勝手に話進めて――一体なに考えてんだ、おまえ……は……！」

凛の理不尽な行動に業腹したのか、シロウが彼女の肩を取って歩みを止める。けれど、振り向いた彼女の表情を見て、どうやら氷つ

いてしまったようだ。
何故なら、彼女は先程までの笑顔とは違うまったく別の表情をしていたから。
「衛宮くん？　突然の事態に戸惑うのは分かるけれど、素直にその事態を認めないと命取りって時もあるの。ちなみに、い・ま・が！
その時だって分かって？」
「だ……だけど……」
「――死にたいのかしら、衛宮くんは？」
「……」
「はい、分かればよろしい」
シロウの沈黙を肯定と受け取った凛に笑顔が戻る。それから、改めて私の方へと視線を向けてきた。
「それじゃ行きましょうか。貴女もそれでいいでしょセイバー？
貴女のマスターに色々と教えてあげるんだから」
確かに、私が説明するよりも凛が説明する方がシロウには理解しやすいだろう。それに、今はまだシロウと顔を合わせて冷静でいられる自信もない。
私とて突然の事態に動揺しているのだ。
「はい。貴方がマスターの助けになる限りは控えています」
私と凛。並んで衛宮家の門をくぐる。
その場に一人取り残された彼は
「なんでさ。なんであんなに怒ってるんだ、あいつ……」

と、しばらく呆然と佇んでいた。

『――――“Ｍｉｎｕｔｅｎ　ｖｏｒ　Ｓｃｈｗｅｉｂｅｎ”……』

凛の呪を詠む声が衛宮家の居間に響いている。その効果を受け、畳の上に散乱していたガラスの破片が組み合わさり、復元を開始した。

一連の光景を呆然と見つめているシロウ。

同じ魔術師でも凛とシロウでは方向性が違う。

「――凄いな、遠坂。俺にはそんなこと出来ないから、直してくれて感謝するよ」

「え？　出来ないって……そんなことないでしょ？　こんなの魔術の初歩の初歩じゃない。ドコの学派でも同じでしょ？」

「そうなのか。けど俺は正式に教わった事がないから、基本とか初歩とか知らないんだ」

ピタリと、凛の動きが止まった。

あれは予想外の出来事に戸惑っているのではなく、何故だかわからない怒りを押し殺しているのだろう。

「……ちょっと待って。じゃあなに、衛宮くんは自分の工房の管理も出来ない半人前ってことかしら？」

「工房？　そんなの持ってないぞ、俺」

「……えっと、なに？　じゃあ、本当に貴方、素人？」

「そんな事ないぞ。強化の魔術くらいは使える」

「強化って、また随分と半端なのを使うのね。で、それ以外はから

っきし駄目なワケ？」

おう、と横柄に頷くシロウ。

これは……そろそろ“きそう”ですね。

危険を感じ取った私は、凛とシロウから少し距離を取った。

そしてやはり

「――――な、なんだってこんなヤツに、セイバーが呼び出せるのよぉぉぉっッーーーー！」

夜の深山に、凛の嘆きにも似た絶叫が響き渡った。

聖杯戦争とは、どのような願いでも叶える万能の器――聖杯を巡ったサバイバル・ゲームである。

マスターとは等しく魔術師であり、彼等が聖杯の助けを借りて呼び出されるのがサーヴァントと呼ばれる英霊達だ。マスターはサーヴァントを使って他のマスターを駆逐し、聖杯を得るのが目的となる。

そこで行われるのは、文字通りの殺し合い。

「私が教えてあげられるのは、貴方がもうマスターで戦うしかないってことなの。サーヴァントは強力な使い魔だからうまく使いなさいってことだけよ」

凛の説明は淀みがなく、整然としていて解りやすい。

聖杯戦争に対して何の知識もないシロウでも、よく理解できるような丁寧な説明だった。

「それが聖杯戦争という儀式のルール。貴方が選ばれたものの本質なの」

衛宮の家に私とシロウ、それに凛がいる。状況こそ違えど、こうして三人でいる空間にとても懐かしいものを感じた。

あの時は聖杯戦争に勝つことばかり考えて、この雰囲気を楽しむ余裕はなかったけれど、改めてこの場所を鑑みればとても暖かいものを無碍に放り出していたのだと実感する。

「それに衛宮くんだって、本当のところは理解しているんじゃない？　だって、一度ならず二度までもサーヴァントに殺されかけたんだから」

「……」

「ああ、殺されかけた――じゃないわね。だって衛宮くん。学校で実際に殺されたんだもの」

淡々と続いていく凛の説明に、シロウも自身の置かれた立場を理解し始めたようだ。

しかし、凛の思わぬ言葉を呼び水に、シロウが疑問の声を差し挟む。

「ちょっと待ってくれ。遠坂、俺がランサーに殺された事を知っているのか？」

「――――ッ！？　やば……少し調子に乗りすぎたか」

目を見開いて驚き、自分の失言を後悔する凛。

シロウは“どうしてその事実を彼女が知っているのか”それが気になったのだろう。しかし凛は、そんなシロウの疑問をキッパリと否定した。

「……ただの推測よ。つまんない事だから忘れなさい、衛宮くん」
「つまんない事じゃないぞ。俺はあの時、確かに命を助けられた。本当なら死んでいたところを“誰か”に助けられたんだ。それを知ってるってことは――」
「いいからっ！　そんな事より今はもっと知らなきゃいけない事があるでしょっ！」

無理やりに話しを捻じ切って凛が説明を再開する。その剣幕に押されたのか、シロウも不承不承ながら話しの続きを聞くことにしたようだ。
それからしばらく、二人のやり取りだけが続いていく。そして、話が一段落したところで凛が立ち上がった。

「さぁて、話しも纏まったところで、そろそろ行きましょうか」
「ん？　行くって何処へさ？」
「もちろん、貴方が巻き込まれた“聖杯戦争”をよく知っているヤツに会いに行くのよ」
「え？　こ、こんな時間からかっ！？」

シロウが時計で時刻を確認している。
説明を開始してからかなり時間も経っている。もう深夜といって良い時間帯だった。

「そうよ。今からでも急げば夜明けまでには戻ってこれるんじゃないかしら。明日は休日だし、別に夜更かししても問題ないわよね？」
「いや、そういう問題じゃなくってだな……」

シロウがチラチラと私に視線を送っているのが分かる。
言うべきか、言うまいか。

しかし逡巡はさほど続かず、彼は困ったように嘆息してから口を開いた。

「……だいたいセイバーが困るだろ？　セイバーって昔の英雄なんだろ？　なら現代のことなんて分からないことだらけのはずで、そっちから説明するのが筋じゃないか。違うか、遠坂？」

ああ、そういう事ですかシロウ。

私は一度大きく頷いてから

「いいえ、シロウ。私達サーヴァントは人間の世であるのなら、あらゆる時代に適応します。ですからこの時代のこともよく知っている。それに、この時代に呼び出されたのは初めてではありませんから」

「なっ――！？」

「嘘……？　どんな確率よ、それ……！？」

二人が絶句している。

そう。私がこの時代に来るのは“三度目”だ。

「初めてじゃないって、本当か、セイバー？」

「ええ。その通りです、シロウ」

本来なら二度とあるはずのない奇跡。

暁に彩られた世界で、別れを告げたはずの貴方に出会えた奇跡。

「……セイバー、おまえ……」

「じゃあ、問題ないワケね、衛宮くん」

彼の声を掻き消すタイミングで凛が声を挟む。その為にシロウが

何と言ったのか正確には聞きとれなかった。彼も大した用件ではなかったのか、不満の色を滲ませながら凛の方へと顔を向けてしまう。

「分かった。行けばいいんだろ、行けば。それで何処に行こうってんだ遠坂？」

「隣町にある教会よ。そこにこの聖杯戦争を監督してるヤツが居るのよ」

「監督……？」

「そ。行けば分かるわよ」

凛が不敵な笑みを浮かべ、じーっとシロウを見つめていた。あれは何も知らないシロウを振り回して楽しもうという表情ですね。

今度私もやってみましょうか。

その表情から何かを感じ取ったのか、シロウは怯えたように凛からそっと視線を逸らしていた。

夜の冬木の街をシロウと凛と共に歩く。

時刻は深夜。寒く冷たい空気と相まってか、出歩いている人影は私達以外には見当たらない。明るい月の光だけが私達を照らしている。静寂に満ちた世界。

それでも彼は用心の為にと――

……はあ。

半ば予想はしていましたが“また”これを着ることになるなんて。

鎧を脱がないと言う私に、シロウが用意したのはいつかの黄色いレインコート。思わず抗議の意味を込めて無言になってみたりもしましたが、果たしてシロウに如何ほどの効果があるのか。

じーと視線で圧力でもかけてみましょうか。

「こっちから行こう」
「え？　何処に行くのよ衛宮くん？　そっち、道が違うわよ」
「隣街に行くんだろ？　ならこっちから橋を通った方が近道だ」
任せろというシロウの言葉を受けて、川沿いにある公園を目指して歩いている。
公園から橋を渡って新都に行こうというのだ。
「へえ、こんな道があったんだ。そっか、新都には橋から行けるんだから公園を目指せばいいのよね」
公園に着いた途端、凛が辺りを見回しながら弾んだ声を上げている。その声に釣られた訳ではないが、私も辺りを窺ってみた。
深夜、私の視界に映る公園は、何時か見た光景を思い出させる。
そうだ。私はこの場所で――自身の半身を見つけたのだ。
忘れようとしても、忘れることは出来ない。
あの時、彼に手を引かれ家路に着こうとした時に突然現れた災厄。想像すらしなかった第八のサーヴァント出現。
『待たせたな、セイバー。約束通りこうして迎えに来てやったぞ』
頷くわけにはいかない。
結果として戦うことになった私は――
『いいだろう。では――――力ずくだ』
襲いくるエアの咆哮。
あの黄金のサーヴァントとの死闘に私は――敗れたのだ。

まるでゴミ屑のように撃ち捨てられてもどうすることも出来ない。それほど圧倒的な力の差がギルガメッシュと私の間にはあったのだ。

――悔しかった。

――自分が情けなくて泣きそうだった。

だって、私が倒れるということは、シロウを守れないということなのだから。

そんな彼もまた、ギルガメッシュの凶刃に倒れ、真っ赤な血の海で沈んだ。

敵うはずもないのに。届くはずもないのに。シロウは“私を失わない”為に戦ってくれたのだ。その行為に私は恐怖した。切なくて心が砕けるかと思った。だって、私は、私が消えることよりもシロウがいなくなる方が嫌だったのだ。

瞳を閉じればあの時の光景が鮮明に蘇ってくる。

視界は血で赤く染まり、声はか細く、それでも必死になって叫んだ。

『もう無理だと、どうして判らないのです……！』

私の声を振り払い、傷ついて、血まみれになって、死にそうに呻きながらも、それでも戦おうとした。

『いらないっ！　貴方の助けなどいりませんっ！　私は……既に貴方の剣ではないんです……！』

彼は流れ出る鮮血もお構いなしに、絶望ともいえる相手に突き進んでいた。

『やだ、止めてくださいシロウ！　それ以上はダメだ……！　本当

に、本当に死んでしまう。こんな、こんな事で貴方に死なれたら、私は――――』

罵倒しても、懇願しても、哀願しても、彼はその歩みを止めようとしない。

うるさいと。黙ってろっと。そうしないと大事なものを失うからと。

『俺には、セイバー以上に欲しいものなんて、ない――』

シロウの心を感じる暖かい言葉だった。

そして激闘は、一つの“奇跡”によってその幕を閉じる。

その末に辿り着いた一つの真実。

――――やっと気づいた。シロウは、私の鞘だったのですね。

「――――――――――――」

冷たい冬の木枯らしが、そっと頬を撫でていく。

私はゆっくりと目を開いてから視界に彼の姿を捜した。

当のシロウは、私の少し先を歩いていたが距離が開いたのに気付いたのだろう。立ち止まって私を振り返っている。

「いいから、もう行くぞ。別に遊びに来たわけじゃないんだから」

叫ぶ彼の後を小走りに追った。

橋を越えれば新都へ至る。とはいえ目的の教会まではまだ少し時間がかかるだろう。

なら、少しだけ、あの時のことを思い出していよう。幸いフードに隠れて、私の顔は二人には見えないのだから。

第三話

「これは……凄いな」

教会を見上げたままの姿勢でシロウが感嘆の声を上げている。
高台のほとんどを敷地にし、その奥に建てられている教会は、外観以上の荘厳さを感じさせる作りになっていた。深夜という時間も相まって威圧感すら感じる。

「衛宮くん、ここは初めて？」
「……ああ。来たことはない。孤児院を兼ねてるって話くらいは知ってるけどさ」
「そう。じゃあ少しばかり肝を冷やすことになるかも」
「なんでさ？」
「さあ。どうしてかしらね」

不思議そうに首を傾げるシロウには答えず、凛は含むように笑ってから教会を目指して歩き出す。そうされるとシロウとしては立ち止まるか、凛に付いていくかの二択しかなくなってしまう。
結局、シロウは凛に付いていくことにしたようで、歩みを進め……やおら、私の方へと振り返ってきた。

「どうしたセイバー？　ほら、行くぞ」
「……そうですね。私は貴方の剣だ。傍にいて貴方の身を守る義務がある」
「大袈裟な奴だな。ちょっと話を聞くだけだってのに」

暢気という訳ではないのだろうが、落ち着いた口調で私を促すシ

ロウ。
以前私はシロウが話し終えるまで外で待機していたのだが、この教会の神父は気を許せる相手ではない。無事に出てくると“知って”はいるものの、待っていることなど出来なかった。

ギィィと音を立てて重厚な扉が開かれる。そうすることで一気に視界が開けた。
中は一般的な礼拝堂と同じような作りになっているが、敷地はかなり広いほうだろう。しかし時間帯故か中に人の気配はない。

「遠坂、ここに居る人ってどんな感じの人なんだ？」

広い空間にシロウの声が反響している。

「どんな感じって、口で説明するのは難しいわね。十年来の知人だけど、私だって未だに性格は掴めてないもの」
「十年……か。そりゃまた随分と年季が入った関係だな」
「一応わたしの後見人よ。ついでに言えば第二の師っていうところかしら」
「なんだって？」

大仰にシロウが驚いている。目を剥くという感じだ。

「なに驚いてるのよ、衛宮くん？」
「だって……普通驚くだろ。教会の人だろ？　そんな人が魔術とかって……ご法度じゃないのか？」
「だからエセなのよ。聖杯戦争の監督役として派遣されたヤツだもの。バリッバリの代行者よ。ま、もっとも、神のご加護があるかは大いに疑問だけど」

その時、かつん、という高い足音が礼拝堂に響いた。続けてアルトで響きの良い女性の声が耳に届く。

「失礼ね、凛。少しは師を敬ってくれても良いんではなくて？」

その人物は奥へと続く扉から現れ、ゆっくりとこちらに近づいてきた。

「な――っ！？」

思わず声が洩れる。

“彼女”は美麗な修道服を身に纏い、優雅な仕草で私達を観察している。

身長はシロウより少し高いかもしれない。綺麗な緑色の髪は肩で切り揃えてあり、ゆるやかなウェーブを描いている。スラリとした細身の美女。見た目から年齢は二十代の後半あたりだと判断できる。

その“彼女”は大仰に掛けている眼鏡を押し上げ、靴音を鳴らしながら私達の前まで進んできた。

「まったく。呼び出しにも応じないかと思えば、こんな夜中に変わったお客を連れてくるなんて――相変わらずねえ」

「お久しぶり……かしら。レヴィア」

――レヴィア。凛がそう呼んだ人物を私は知らない。

私が知っているのは黒衣の男。ここに居るのは言峰綺礼という男のはずだ。なのに、どうしてこの場に知らない人物が現れるのか。

僅かに緊張感が増す。

勿論、まだ敵だと決まったわけではない。けれど私は、いつでも聖剣が抜けるように体勢だけは整えておいた。

「へえ。彼が“七人目”という訳ね」

レヴィアと呼ばれたシスターが、シロウをねめつけるように視線を這わせている。

「そうよ。一応魔術師なんだけど、中身はてんで素人だから見てられなくって」

「素人？」

レヴィアは右手を顎先に当てながら、ふむ、と頷くと、改めてシロウの目の前まで歩んできた。そして彼に向かって優雅に一礼をしてみせる。

「私はこの教会を任されているシスターでレヴィア・エーデルフェルトと申します。七人目のマスター。貴方の名前を教えて貰えるかしら？」

やはり並んで見るとシロウよりも少し長身だった。

だからという訳ではないだろうが、彼女の迫力に押されたようにシロウが少し後ずさる。その際、彼女の顔や胸あたりを凝視していたような気も――シスターの微笑みには艶やかさがあり、女性である私でも見入ってしまうほど――したが、決して彼女の色香に押された訳ではないと強く思うことにした。

「……コホン」

軽く咳払いをしてみる。

それに触発されたのか、シロウも遅れて自己紹介を始めた。

「俺は……俺の名前は衛宮士郎。けど、まだマスターになるって決めた訳じゃない」

シロウの言葉を受けてシスターの目が驚きに開かれる。

「衛宮――――？」

衛宮の名前を聞いて絶句するシスター。しかしそれも一瞬のことであり、彼女はすぐに柔和な表情に戻して、何事も無かったかのように会話を続けた。

「そう。衛宮……士郎くんね。そして――」

眼鏡の奥の瞳が私に向けられた。その目がさっきとは別の意味で丸くなる。

「そちらがセイバー……かしら。でも、どうして雨合羽なんて着ているの？」

「……」

「ふう。まあ、いいわ」

どうしてこれを着ているのか、その理由ならシロウに聞いて欲しい。けれど私の無言の答えを無視だと受け取ったのか、彼女は私から視線を外し、再びシロウの元に戻した。

その際に、胸元にある銀のクロスを軽く撫でるように指を這わせ、シロウに強調してみせたのを私は見逃さなかった。

「えっと、士郎くんって呼んでもいいかしら？　貴方は先程マスターになるって決めた訳じゃないって言ったわね？　でも、それは大きな勘違いよ」

「……どうしてさ？」
「もう既にマスターになっているからよ。なってしまった以上辞めることも他人に譲ることも出来ないの」
「そんなの、俺が聖杯戦争に関わらなければいいだけで、それで済む話なんじゃないのか？」

シロウの答えを受けて、シスターが落胆したように短く嘆息した。
それから小さく肩をすくめて、凛に身体ごと向き直る。

「だから素人だって言ったじゃない。監督役としてしっかり説明してあげてね、レヴィア」
「……そうね。じゃあマスターとは何か、聖杯戦争とは何かから説明しましょうか」

七人のマスターと七人のサーヴァント。聖杯戦争という名の殺し合い。
求めるものはただ一つ。どのような願いでも叶えると云われる万能の器――聖杯。歴史に名を残す本物の聖杯なのかどうかはここでは関係ない。
現実に願いを叶える力があり、勝者に“それ”が与えられるということが重要なのだ。

「サーヴァンとの基本クラスは七つ。即ちセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、バーサーカー、キャスター、アサシン。その枠に当て嵌めて英霊を召喚し、マスターに従わせる。最も、サーヴァントにも意思があるわけだから必ずしもマスターの意向に沿うとは限らない。故にマスターには命呪が与えられているのよ」

次々とシロウの知らない事柄が明らかにされていく。
シロウは時に質問し、凛に補足されたりしながら根気良く話しを

聞いていた。彼なりに必死になって、自分が撒き込まれた聖杯戦争というものを理解しようとしている。
淡々と紡がれるシスターの言葉。レヴィアの説明を受ける中で、シロウは一つの決断を迫られていた。

――それはマスターとして戦うのか否か。

マスターを辞めることは出来ないと彼女は言ったが、その気になれば辞めることは出来る。故意に令呪を使い切ってサーヴァントとの契約を絶てばいいのだ。
私は彼が戦う道を選ぶことを知っている。
けれど、万一の確率で彼が私との契約をやめると、聖杯戦争に参加しないと言ったら？
そんなことはありえない。ありえないのに、一抹の不安が胸に去来し離れないのだ。
私はそっと彼の横顔を盗み見る。
真剣な表情。シロウからは突然の事態にも奥せず立ち向かう意思が感じられる。

「死傷者五百名、焼け落ちた建物は実に百三十四棟――」

その言葉を聞いた瞬間、シロウの表情が強張った。
息を呑むという言葉そのままに。もしかしたら、少し震えていたかもしれない。

「未だに原因不明とされるあの火災こそが、前回の聖杯戦争による爪跡よ」
「……ッ！」

顔面蒼白になりながら、揺れる身体を必死に大地に繋ぎ止めるシ

ロウ。
この街で起きた火災の被害者であり、唯一の生き残り。彼にとっては辛い事実。シロウの苦悩が伝わってくると感じるのは自惚れだろうか。それでも彼は、辛い事実さえ乗り越える。
かの暗い地下の聖堂で、私に“間違った事実”を気付かせてくれたのは、彼の強い心の叫びだったのだ。

そこまで考え――思い出す。
そうだ。あの地下聖堂はここの地下にあるのだ。

黒衣の神父はいない。だが地下聖堂がないとは限らないのだ。
果たしてあの場はどうなっているのだろうか。気にならないといえば嘘になる。しかしこの場を脱して調べに行く訳にもいかない。酷いようだが、今はそれよりも優先することがあるのだ。

「士郎くん。マスターとして選ばれるのは魔術師だけよ。その魔術師である貴方に覚悟はないのかしら。さあ、答えなさい衛宮士郎。この聖杯戦争を戦い抜くのか否かを」

決断が迫られる。けれど私が声を挟むことは出来ない。これは彼が決めなければいけないことだからだ。私に出来るのは、シロウを信じて待つことだけ。
一瞬の沈黙は葛藤の現れだろう。
その後、彼は意を決したとばかりにシスターを見上げて

「――――戦う。俺はセイバーのマスターとしてこの聖杯戦争を戦う。あの火災が前回の爪跡なんだとしたら、あんな不幸な出来事を二度と起こさせる訳にはいかない」

はっきりと、そう宣言した。

「良い返事です。今回の聖杯戦争の監督役として正式に貴方をセイバーのマスターとして認めましょう。ようこそ、こちら側の世界へ――衛宮士郎」

シスターのアルトな声が礼拝堂に響き渡る。

こうして彼は、セイバーのマスターとして聖杯戦争に挑むことになった。

一段落ついたとばかりに、凛とシスターが会話を開始する。しかし既に私の意識は外へと向いていた。

妙な違和感が身体に纏わりつく。まるで誰かに見られているように。

――なんだこれは？

感じた違和感は敵意ではない。どちらかと言えば魔術や使い魔から受ける雑感に近い。

距離は判別できなかった。少なくともこちらから視認出来る距離にはいないだろう。ならば監視されているというより、様子を窺っているといった方が正確だろうか。

直接的な脅威ではないなら、今は詮索するべきではないのかもしれないが……。

「それじゃ、行きましょうか」

凛の声を受けて私の思索が打ち切られる。どうやらシスターとの会話も終わったようだ。

用件が済めば積もる話はないとばかりに、挨拶もそこそこに凛が

踵を返す。私とシロウもそれに合わせて、礼拝堂を後にしようとシスターに背中を向けた。
そのタイミングで、背後からシロウへ言葉が投げかけられる。
「そうだわ、士郎くん。最後に一つアドバイスをあげましょう」
人差し指を立てながら、つかつかとシロウに向けて歩み寄ってくるシスター。
ちょっと近寄りすぎだ。
「む……アドバイスってなんだよ」
「聖杯とは万能の器。どんな願いでも叶えることが可能なの。そう――どんな願いでもね」
こういうのを妖艶というのだろうか。シスターは艶のある微笑みを浮かべシロウを見つめている。
「求めなさい、衛宮士郎。そうすればきっとあなたの願いは叶う」
全て見透かしたような視線。眼鏡の奥にある緑色の瞳がシロウを一直線に貫いている。
――求めれば、叶う。
それは魔力の篭もった言葉のように、私にも、そしてきっとシロウにも染み渡っていった。だけど、どんな魅力があっても、私もシロウも聖杯を求めることはない。それはこの身をもって知っている事実。
それでもこの言葉は、小さな針のように心に突き刺さってくる。

「あんた……なにを……知ってる……？」
「私は監督役。この聖杯戦争を円滑に進めるのが役割なの。だからイレギュラーな事態が起これば対処する。けれど――この戦争の終結まで、あなたたちに会わないことを願っているわ」
シスターの綺麗な声を最後に、教会の扉は閉ざされた。

礼拝堂から外に出ると風が強く吹いていた。
冬の冷気が肌を刺すものの、空に雲はなく数多の星が煌くように瞬いている。ここは丘の上に当たる為か、地上よりもたくさんの星が見えるようだ。
故郷の星空を思わせる景色。それが私には少し嬉しかった。
そう感じたからだろう。私は知らず空を眺めていたようで、だから、シロウが私を見ていることに気付くのが少し遅れてしまった。
「シロウ、どうかしましたか？」
何かやりたいことがあるのに、決断がつかないとばかりに口を噤むシロウ。けれど、頭を振ってから意を決したのか
「いや、そのさ……頼りないマスターだけど、これからもよろしくな、セイバー」
そう言って、照れたように右手を差し出したのだ。
私はシロウの差し出された右手を呆然と眺めているだけで、芳しい反応が返せない。
それを不審に思ったのか、彼の表情が少し翳る。
「あれ？　もしかして握手は駄目なのか？」

「い、いえ。突然だったので、少し、驚いただけです」

互いの右手を重ねる。

それだけでシロウの温もりが伝わってきた。風は冷たいけれど、この温もりさえあれば寒くなどない。

そう思えるほどに。

「今一度ここで誓いましょう。私は何があっても貴方の剣であり続けます。そう、何があっても――」

「……ああ」

手を握り合って微笑み合う。なのにどちらもぎこちない笑みしか浮かべていられない。

それが何だか私とシロウらしい。そう思った。

「――ふぅん。その分じゃ放っておいてもよさそうね」

「と、遠坂っ！？」

「凛っ！？」

慌てて手を離す。

別に見られて困る訳ではないのだけれど、柄にもなく照れてしまったのだ……。

「仲良くなったなら、ちょうどいいわ。貴方達がそうなった以上私達も容赦しないから」

私達――そう言った凛の後ろに、いつの間にかアーチャーが控えていた。

弓の英霊であるアーチャー。

結局、以前の召喚の際に彼の真名を知ることはなかった。彼はバーサーカーから私達……いいえ。きっと凛を逃がす為に犠牲になった。しかし、果たして今回はどうなるのだろう。
以前と違って彼は負傷していない。凛が協力体制を築かないのならば、いずれ戦うこともあるのだろうか。
けれどシロウは凛とは争わないだろう。私も出来れば彼女と事を構えることはしたくない。

「容赦しないって、どういう意味さ？」
「衛宮くん？　私達ってもう敵同士だって理解してる？」
「む？　なんでさ。俺、遠坂と争うつもりなんかないぞ」

私にとっては予想通り言葉だったけれど、彼女にとっては予想外だったのか。凛は、ハァ……と盛大に溜息を吐いた。
シロウは良く言えば実直。悪く言えば朴念仁。なので凛の気持ちも少しは理解できる。私も“何度”そういう気持ちを味わったことでしょう。
しかるに、彼は人の話しを聞いていないと思える節がある。それは彼の大きな欠点の一だと思う。
その凛がキッと視線をきつくして、シロウを睨み据えた。

「あのね、勘違いしているようだから言っておくけど、ここまで連れてきてあげたのは貴方がまだ“敵”にもなっていなかったからよ。けれどセイバーと契約して衛宮くんも正式なマスターの一人になった。この意味分かるわよね？」
「それは――分かってる。でも、やっぱり遠坂とは戦えない。それは俺の目指す戦いじゃない」
「衛宮くん……あのね……」
「凛、このままでは埒があくまい。相手の覚悟など確かめずとも、倒し易い敵がいるのなら遠慮なく叩くべきだ」

凛の声を遮るようにしてアーチャーが意見を挟み込む。
「アーチャー？」
「それとも何か？　君は“また”その男に情けをかけるのか」
その言葉をは逆鱗だったのか。はっきりと分かるくらい凛の表情が変わった。
殺気を纏ったような厳しい表情に。
「……アーチャー。そのことは言わないはずよ。それともなに？令呪で縛って欲しいの？」
「いや、これは失言だったか。マスターの意向には添うように努力しているのだがね、この男に関してのみどうも抑制が効かない」
場の雰囲気が少し危ういものに変わっていく。
アーチャーははっきりとシロウを敵視しているように見える。微々たるものだけれど殺気すら感じた。
前回は感じることのなかった気配。それは私の勘違いだったのだろうか。
そう思った時、何の前触れもなく軽やかな少女の声が響いた。
アーチャーの微かな殺気など吹き飛ばすような、明確な殺意を持って。
「――――ねえ、お話は終わり？」
綺麗な声音。まるで銀細工が奏でるような澄んだ音。
歌うような軽やかな少女の声は、教会へ続く坂道の下方から聞こ

えてきていた。

「こんばんわ、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

シロウを見上げながら無邪気に笑っているのは、冬の娘。そして、その少女の隣に聳えるようにして黒い巨人が立っていた。

「あれって……バーサーカー……？」

凛の声が震えている。

正規のマスターである凛には、あの敵の恐ろしさが正確に伝わってくるのだろう。

「なんだ……アレ……」

シロウなど完全に凍りついている。

無理もない。アレは生きるもの全ての本能に訴えかけるものがある。

即ち――逃げなければ死ぬと。触れれば壊されると。

絶対的な死の象徴。同じサーヴァントを以ってしても太刀打ちさえ出来ない難敵。

「本当、反則モノだわ……。あれってセイバー以上じゃない……」

震えながらも、それに負けまいと凛がバーサーカーを睨みつけている。

――気丈だな。

凛に感心しながらも、私は静かに聖剣を出現させた。

最早、戦いは避けられない。

「シロウ、決して前には出ないでください」

「え、セイバー？」

「何があっても――例えば、私が倒されそうになっても、自信の安全を最優先させてください」

シロウの前に出て、彼を守るように聖剣を握り込む。

――バーサーカー。その正体はギリシャ神話最大の英雄ヘラクレスだ。

彼に生半可な攻撃など一切通じない。英霊であるサーヴァントの力を以ってしても、傷一つ付けることすら困難なのだ。

故にあの敵を打倒するには“奇跡”が必要になってくる。

以前戦った時は、押し込まれ、打ち倒され、傷ついて倒れた。だけれど今の私はあの時とは違う。あの時以上に守りたいと、失いたくないと思っている。

――敵が何者であれ、私はこの手にある剣で斬り払うのみ。

道が開けないのであれば私が開く。

決意を込めて構えを取った時、背後から僅かな身じろぎの気配を感じた。

「凛。アレは生半可な相手ではない。ここは三人で当たった方が得策だと思うが」

アーチャーは冷静に状況を分析しているようだ。

そう、以前と違い今は弓の英霊も健在なのだ。

――勝算はある。

「――――そうね。逃げるって訳にもいかないし。セイバーはそれでいい？」

「はい。前衛は私が勤めます。凛とアーチャーは後方からの援護を」

勝手に話を進められた。そう思ったのか、シロウが声を荒げた。

「ちょっと待ってくれ。俺は数に入ってないのか？」

「戦うのは自由よ、衛宮くん。でも出来るなら逃げなさい。貴方もマスターなら、あの敵が如何に化物なのか分かるでしょう？」

アーチャーと凛も構えを取る。

それを待っていたかのように、冬の娘から明るい声が届いた。

「相談は済んだ？　なら、始めちゃっていい？」

かの娘は心底今の状況を楽しんでいるようだ。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン……！？」

彼女の名前が凛に動揺が走らせる。

それを確認してから、イリヤスフィールが愉快な調子で殺戮開始の合図を下した。

「――――じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

坂道を飛ぶように駆け下りた。
その下方、闇の中を黒い巨人が疾走する。
坂を駆け上がってくる巨大な体躯。それは全てを破壊する重戦車を思わせる突進だった。
そんなバーサーカーに向かって、闇の中を閃光が走る。
それはアーチャーが放つ光の矢。光矢は幾条もの軌跡を夜の闇に穿ちながら、バーサーカーに向かって突き進む。

「■■■■■■■■■■■■■■■！！」

放たれた矢の合計は六。その一つ一つが砲撃もかくやという威力を持っている。
それがすべてが直撃だった。それでもバーサーカーには怯む気配すら生まれない。

「うそ、効いていない――――――！？」

驚愕の声は遠坂凛。
光矢を退けた巨人は速度を緩めず駆け上がり――瞬間、激しい衝撃がこの身を震わせた。

「――ちぃ！」

バーサーカーの斧剣と私の聖剣が空中でぶつかり合い、そこを中心に発生した衝撃波で視界がぶれる。
そこから続けざまに振るわれる巨人の一撃。威力も速度も尋常ではない。だが、撃ち負ける訳にはいかない。

「はあぁぁぁ――ッ！！」

剣に魔力を込めて、唸りを上げて迫る一撃を打ち払う。
その都度衝撃波が発生し、砂塵が撒き上げられた。私の聖剣とバーサーカーの剣斧。ぶつかり合い奏でられる剣戟の音は、どこまでも激しくなっていく。

――踏み込めッ！

直撃を受ければ、如何に神秘に編まれた鎧に守られていようと致命傷は避けられない。それでも敵の間合いの中に身を晒し、一撃を撃ち込む。
何故なら私はセイバーだ。
剣を扱って負ける訳にはいかない。

「……ッ！　アーチャー！　援護ッ！！」

凛の声に応じて今度は八矢、アーチャーの矢が放たれた。
それは眉間であり、鳩尾であり、心臓、喉元と人体にあるあらゆる急所に向かって飛んでゆく。
それでも――

「■■■■■■■■■■！！」

七発までがバーサーカーによって払われてしまった。唯一こめかみに直撃した矢もダメージを与えてはいないようだ。
しかし、僅かに隙が出来た。
この好機を逃さず、全力で聖剣を撃ち込み――

「――なっ！！」

それすらもバーサーカーは払い退けた。
更に一撃を振り払った刃が嘘のように振り戻り、私を襲う。
「……ぐ――ッッ！」
幸い聖剣で受け止めたものの、私の身体は木の葉のように軽く十メートルは吹き飛ばされてしまった。
追撃してくるバーサーカー。
それを阻止しようと、アーチャーの矢と凛の魔術が炸裂するが……。
「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」
咆哮を上げながら巨人が疾走する。
かの敵は十メートルなど一瞬で渡りきり、下段から掬い上げるような一撃を私に向かって撃ち放つ。
「――ッ！？」
更に吹き飛ぶ小さな体躯。
衝撃で視界がブレるが、それでも視線を巨人から逸らさずまっすぐに見据え……
「馬鹿なっ！？」
驚愕を通り越し、思考が止まる。
死の気配を持ったまま迫りくるバーサーカー。その向こう側に、視界の隅に、こちらに向かって駆け出そうとしているシロウの姿が目に入ったのだ。
彼は焦燥したような表情で何事かを叫び上げている。

――どうして？　来ないでと言ったのに。

ぎりっと臍を噛む。

このままでは“あの時”と同様にシロウがバーサーカーの前に飛び出してくるかもしれない。

以前、一度、彼は私の身代わりとなってバーサーカーの凶刃に倒れたのだ。

自身の安全よりもサーヴァントの身を優先させるなど、マスターが取るべき行動ではない。考えられる限り最悪の行動であり、愚かなマスターだと言える。

それでも、そんな彼だからこそ私は誰よりも愛しく想っている。

あの時は鞘の加護で助かった。けれど今度も同じ目に遭って助かる保証はない。

ならば、私の取るべき道は一つだけ。

一瞬だけ視線を逸らし“場”を確認した。

あの場所ならば、こちらの力を活かし巨人の力を減じることが出来る。

刹那、迫るバーサーカーの一撃。

全てを砕くような津波のような一撃だった。私はそれを受け、力に乗るようにして――

「セイバァァッ――ッッ！！」

シロウの絶叫が響く中、私は空中高く飛ばされていた。

「あっはっは。そのままやっちゃえ、バーサーカー。どうせアーチャーとリンじゃアナタの宝具は越えられない。先にセイバーを殺しなさい」

イリヤスフィールの声を受けて巨人が疾走する。それを視界の隅に捉えてから私は受身の体勢を取った。
そうだ、追って来いバーサーカー。
私を追ってここまで――自分の死地まで来いっ！
聖剣を握る手に思いと魔力を込めて。私は心の中で叫んだ。

「セイバァァ――ッッ！！」

既にアーチャーと遠坂は、セイバーとバーサーカーの後を追って駆けている。
セイバーは空中高く吹き飛ばされて、近くにある荒地――教会墓地までその身体を運ばれていた。

「……これが、聖杯戦争。サーヴァント同士の戦い……」

身体が震えて、震えて、両手で肩を抱いても止まらない。
怖くないはずがない。バーサーカー、アレは桁違いだ。衛宮の庭で見えたランサーも強かったが、そもそも存在が違う。追えば殺される。そんなこと、言われなくてもハッキリと判ってしまうくらいに。
それでも、それでも！　あの少女を失うことの方がもっと怖かった。

ついさっき、手を重ねて一緒に戦うと誓ったばかりなのだ。
青い月の光で満ちた土蔵での邂逅。あの幻想にも似た世界が胸の中に去来する。
金砂のような滑らかな髪。吸い込まれそうなほど深い碧の瞳。その綺麗な姿に見惚れた。本当に華奢で小さな少女なんだ。そんな彼

女があのバーサーカーと戦ってるんだ。

「くそッ！　答えなんて、とうに出てるじゃないか」

全力で駆け出した。

俺に何が出来る訳でもない。遠坂の言うように逃げるのが一番なのかもしれない。それでも俺には、彼女を、セイバーを見捨てることなんて出来なかった。

会ってから数時間しか経っていないのに、彼女は俺の為に戦ってる。俺に何が出来なくても、彼女のマスターならばせめて近くに。

息が切れるのも構わず駆け続けて墓地に到達した。

そこで俺は――神話の再現を見ることになる。

結論から言えばセイバーは健在だった。

墓石が乱立する中を縦横無尽に駆け抜け、彼女はバーサーカー相手に一歩も引いていない。

対するバーサーカーは神話に登場する怪物そのものだ。巨人は一振りで墓石を薙ぎ払い、セイバーの激烈な剣戟を受けても怯む様子すら見せない。

墓石は石の塊だ。その重さは相当なものだろう。それが木の葉を散らすように吹き飛んでいるのだ。

――なんて、化物。

そんな言葉が脳裏に浮かんだ。

そうだ。これは怪物に挑む勇者の物語。

儚い少女が巨人に挑む、神の物語。

激しい閃光が走る。あれは、剣戟による魔力のぶつかり合いか――？

「ちょっと、衛宮くん、なんでいるのっ！？」

セイバーとバーサーカーの剣舞に夢中になっていたら、何処にいたのか、気づいたら遠坂が隣にいた。

「なんだ、遠坂か」

「遠坂か、じゃないでしょっ！　とにかくそこは危ないから下がりなさい！！」

引きずられるようにして、遠坂に物陰に連れこまれる。

「逃げなさいって言ったの、聞こえてなかったっ！？」

激昂する声。

何故だか遠坂はかなり本気で怒っているようだった。

「……馬鹿言うな。俺だけ逃げられる訳ないだろ」

「それは一人前になって口に出来る台詞よっ。いいから今からでも逃げなさい」

「半人前なのは否定出来ない。けど……それでも俺はセイバーのマスターなんだ。彼女が戦っていて俺だけ逃げるなんて出来ない」

遠坂は唖然として、惚けたように俺を見ている。

けどそれも一瞬のことで、表情を一変させると地団駄を踏むように足と手を振り上げて――結局、すっと下ろした。

湧き上がった怒りを精神の力で押し殺したんだろう。

けど、一度は沈静化したはずの怒りは結局殺しきれずに爆発する。

「……馬鹿ぁっ！　士郎っ！　あのバケモノ見て死ぬって思わないの！？　アンタに死なれたら、折角助けて教会まで連れてきてあげたのが無駄になるでしょっ！」

そんな罵りを聞いても、俺には怒りより嬉しさが込み上げてきた。

ああ、やっぱりなとも思う。

義務感とかじゃなくて、遠坂はコイツなりに無知な俺を助けてくれたんだ。そんな事をしても自分にとって何の得にもならないのに。

ずっと見ていた優等生な遠坂とは違ったけど、それでも思ってた通りのやさしい娘だったんだ。

それが素直に嬉しかった。

「そっか、やっぱりな。遠坂って良い奴だったんだな」

「なぁ――っっ！」

遠坂の顔が赤くなっていく。

俺は思ったことを口にしただけなんだが、遠坂にとっては予想外だったみたいだ。何か言葉にしようとして、止めたり、やっぱり口を開こうとして、また止めたり、ちょっと見ていて可愛い。

とうとう最後には、拗ねたようにそっぽを向いて口を尖らせていた。

「……ふんっ。衛宮くんがそうしたいなら、そうすればいいわ。もう、知らないんだからっ」

そこへ信じられないような爆音が響いた。

慌てて視線を移してみれば、バーサーカーの一撃が大きく地面を叩き砕いている。セイバーはと視線を転じてみれば、巨人を廻り込むようにして斬撃を加えていた。

ここにきて、セイバーはあのバーサーカー相手に互角の剣舞を演じていたのだ。

「……すごいわね、セイバー。この分だとこのまま押しきれるかも……」

遠坂の言う通り確かにセイバーは凄い。あのバーサーカー相手に互角の接近戦を繰り広げている。

触れるだけで墓石を砕き、吹き飛ばすような一撃が乱舞する中を少女の身で戦っているのだ。

それでも――互角。

俺には遠坂ほど楽観はできない。

その時だった。ふとした違和感が俺の脳裏に襲いかかる。

あれ？　おかしい。何か決定的に足りない気がする。

神技のようなセイバーの剣。嘘のようなバーサーカーの破壊力。

この場に足りないものは――

「……そうだっ！」

「ど、どうしたの衛宮くん。突然怒鳴ったりして？」

「そうだよ、アーチャーだ。遠坂、アーチャーの奴はどこ行ったんだ？」

さっきから死闘を演じているのはバーサーカーとセイバーの二人だけ。アーチャーの姿はおろか矢の一矢さえ飛んできてはいない。

「え？　そうね……。一体何処に――」

そこまで口にしてから、はっと遠坂の動きが止まる。

「……え、アーチャー？　離れろって……どういうことよ！？」

遠坂がキョロキョロと辺りを見回している。

何故それが見えたのか、俺には判らない。それでもはっきりと見えた。

ここより小高い丘の上。その頂上で弓を番える奴の姿が。

「……あいつ！」

奴はアーチャーだ。弓を使っているのは不思議でも何でもない。

それでも全身に言い知れぬ悪寒が走りぬける。

とても悪い予感がするんだ。

奴が狙いをつけているのはバーサーカー。

そして、その場所にはもう一人、銀の甲冑に身を包んだ少女が――

「セイバアァァ――ッッ！！」

身体が勝手に動いていた。

遠坂が後ろで何か叫んでいるがそんなものは聞こえない。今は全力で駆ける。あの少女だけを目指して。

渾身の一撃が炸裂する。今の一撃は効いているはずだ。例えバーサーカーといえど不死身ではあり得ない。

衝撃を受け、黒い巨人が僅かに後退する。私は巨人に向かって疾走しようとして――そこで信じられないものを見た。

追撃しようとする私に向かって、マスターが、シロウが突っ込んで来ているのだ！

「シロウっ！！」

あり得ない。こんなこと、あり得るはずがない。

思わず罵倒が口を吐く。

「馬鹿なっ。なぜ出てきたのですか、貴方はっ！」

私の声などお構いなし。シロウは全速力で一直線に私に向かって来ている。

この場にはバーサーカーがいるのに。そんな場所にどうして？

「し、正気ですか貴方はっ！　こんな……ぁ」

シロウが勢いを殺さず私に跳び付いてきた。

少しの距離を飛ぶ浮遊感。その着地後に、彼はそのまま私に覆い被さって力強く抱き締めた。まるで大事なものでも守るように。

致命的な隙だったが、幸いバーサーカーの攻撃はなかった。

バーサーカーは何か別のモノに気を取られたように視線を上げている。

「■■■■■■■■■■■■■■■！！」

瞬間、バーサーカーが吼えた。

黒い巨人は、迫りくる何かに向かって、豪腕の全力を以って迎撃を行う。

刹那――あらゆる音が失われた。

真っ白な閃光が輝いたと思った瞬間、激しい衝撃が大地を通じて襲いかかってくる。

「……なっ！？」

シロウに下敷きにされながら、それを見た。
大きく揺れる炎が墓地を火の海に変えている。凄まじい破壊の余波は未だ各所でくすぶり、バーサーカーの全身をを焼いていた。
先程まで私がいた場所が大きく抉れている。
それは爆心地という言葉がそのまま当てはまるかのような光景。
シロウが来てくれなければ私も炎に焼かれていた。
それでも、そんな炎の中に在っても尚バーサーカーは健在だった。

「よ…かった。セイバー、無事……」
「シ、シロウっ！」

彼の背中に廻した手が濡れた感触を感じ取る。
人の温もりを持ったソレは……。

「血……？　そ、そんなっ。シロウ！　シロウ！　どうして……」
「セイ……バーが無事なら、良…かった。俺な…ら、大丈…夫だから……」
「喋らないでっ、マスターっ！」

彼を抱えて走る。今は一刻も早く彼を安全な場所まで届けないといけない。
両腕を廻して強く抱く。こうすれば“鞘”の加護が彼を守ってくれるはずだ。
大地を蹴る足に力を篭め、私は闇の中を疾走する。今はただ一刻も早くこの場を離れる為に駆けるのみだ。

「……へえ、見直したわリン。やるじゃないアナタのアーチャー。

いいわ。戻りなさいヘラクレス」

ずっと戦況を見つめていたイリヤが、静かな声でバーサーカーを呼び戻す。

それまで暴風のように暴れ廻っていた黒い巨人は、素直に少女の声に従って後退した。

「――なによ、ここまでやっといて逃げる気？」

「逃げるんじゃないわ。見逃してあげるのよ、リン。このまま潰してしまったら面白くないでしょう？　だからもう少しだけ生かしておいてあげることにしたの」

「余裕のつもり？　きっと後悔することになるわよ」

「フフフ。遠吠えにならないように楽しみにしているわ。また会いましょう」

歌うような声と共に、少女は巨人と一緒に闇の中へと消えていった。

セイバーとバーサーカーの死闘。その光景を遠く離れた場所から覗き見ている人物がいた。

そこは落ちた霊脈であり、幾重にも結界が張り巡らされた魔術師の陣地。

――柳洞寺。

その霊地の最奥に、柳洞寺に住む人でさえ近づかない禁忌の場所がある。

暗く、狭い小さな部屋だ。光源は壁に設えられた幾つかの蝋燭の

み。
その部屋の中央で、輝く水晶球を見つめる二人の人物がいた。
一人は深い紫色のローブを纏った妙齢の女。
彼女は口元に微笑を浮かべながら水晶球を巧みに操っている。水晶の表面は一種のモニターとなっていて、先程までのバーサーカーとセイバー、そしてアーチャーの激闘が写されていた。
「成程。バーサーカー……これは厄介な存在ね」
艶やかで、妖艶な美声。
「だけど流石はセイバーと言ったところかしら。あんなマスターに使役されるのは可哀想。正直、勿体ないわ」
ひらりと手を翳すと、水晶球にアーチャーと凛の姿が映った。
「アーチャーの宝具の威力――興味深いわね。こちらも思ったより使えそう。どちらもアナタより余程有能そうだわ」
紫色のローブの女が、侮蔑の意味を込めた視線を第二の人物に向ける。
そこに居たのは華奢な少女だった。
体格的にはセイバーと然程変わらないだろう。華奢な身体に鎧を纏っているのも同じ。その手に剣は握られていないが、視線には切れるような鋭い覇気を宿していた。
しかし、一番注目を引くのは彼女の見事なまでの赤髪だろう。
後頭部で結わえてなお腰まで届くほどの長い髪。それは蝋燭の炎を受けて燃えるように輝いていた。

瞳の色は漆黒。その瞳がまっすぐ水晶球を見据えている。

「せいぜい頑張りなさい“アサシン”。セイバーを手に入れた後で、お払い箱にならないようにね」

操っていた水晶球を消して、ローブの女がその部屋を後にする。

一人だけ部屋に残された少女。

アサシンと呼ばれた赤髪の少女は、じっと一点だけを、水晶球が在った場所だけを見つめていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3492ba/

Fate/stay night 〜 その時聖杯に願うこと

2012年1月11日01時53分発行